



文庫20
364
0

善光寺縁起考才之目錄

伊地知氏書冊

一

如母日本在現の因縁

二

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母

三

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母

四

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母

五

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母

六

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母

七

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母

八

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母

七

如母と種あ大長の家と梅とまりのあ并如母



けきまじは時法に國にやたるは美國のついでに
 こられは像のておのめづるはまゆの徳國より
 日本さうのいひことなかりありとていざも
 神國の威勢よのつて終よまらぬなりとていざも
 とは像よとていひことなかりありとていざも
 ことなかりありとていひことなかりありとていざも
 あんたがまにけりしあつてあつてあつてあつて
 る知に蘇る大は指國富孫奉りしつれり夫國よ
 なるわつは徳ありなるなりとていざも
 日本に神國とせしめし神國の本地八則これなり
 美國のものごとくたしひしつれり八日本に對して野公





長巻三

よしてさうゆの申よりおぼえとあらしてかしきる
 ことてかんの事このそとよりよとがのむとて右
 さまの事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 さかしの事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 ちびく水危にそとて波波の海にそとてま
 経るくまも一村なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 重なる事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 どの事の中より事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 こえまの事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 ちびく水危にそとて波波の海にそとてま
 経るくまも一村なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 重なる事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 どの事の中より事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も
 こえまの事なるものなりあらるゝ(四)大なる今も

此の命とさうだぐしちめこあはげを伴志のたは
親にめ程は過痛とえて若痛のくらは命たうのき
地獄にたうて極大のせめさうらんさうしりくし
はら極大とゆえれど忽ち敵よあいらて九字に敵
五のいこう自取法士の敵まをまたたけれまのさう
とまのつられそらくさんらめさうらさくめ
もうやあめとためひさくさうらさうらさうら
くして其程の洞さうさうあまねしと幸命との
まもさうお月さうさうまは終の天命の敵ま
さうさう大徳のめはくたうさうのしと終人た
れさうのしよを伴志大長も忽ち執痛さうさうて若

病の極さうけらうさう極のいさひも何あはげ
たさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
しさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
の極さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
相とあうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
よららあさうさうさうさうさうさうさうさうさう
善と罵言さうさうさうさうさうさうさうさうさう
よさうさうの極はさうさうさうさうさうさうさう
のしと極さうさうさうさうさうさうさうさうさう

て徳衛一なる勢もさうなるがごとくしりし
 度波野門の勢もさうして警衛のりぬさうしりし
 こくまよりのてさる地獄にたたりたといひ終りし
 刻にも必解さうしてわがびしりんや生ぬれぬる形
 極系より勢もさうし解ぬぬの勢もさうし
 まう大倉水廻れらるしこまひぬることわされれ六
 扱つごの天子の即敏達天皇とすまう被た倉廻れし
 好三年のあつて入敏達天皇は石縁さうし上下の民
 あつこまひぬるしりしつぬあつこまひぬるし
 傷にさうしりしつぬあつこまひぬるし
 まよ考てすまう徳野のりあ帝の徳代は焼し

まひぬる徳野の勢もさうしりし
 人よれさうしりしつぬあつこまひぬるし
 うらつあつこまひぬるしつぬあつこまひぬるし
 残るは納文やまひぬるしつぬあつこまひぬるし
 たつこまひぬるしつぬあつこまひぬるし
 そつこまひぬるしつぬあつこまひぬるし
 一の勢もさうしりしつぬあつこまひぬるし
 てさうしりしつぬあつこまひぬるし
 こつこまひぬるしつぬあつこまひぬるし
 ららつこまひぬるしつぬあつこまひぬるし

七 家より削氏大連さる大連さる大連さる大連さる

乞別を待志大馬の子なり 蛇をにちを信ふ業し
 々々やう 彼のの形は神國朝庭の慈敵あり又
 むまがしぐさめよまうしとぞくしとく先帝の
 帝に帝の神めく徳の人の形と安まはげと神
 的の法とあつさうしあひあまそらうの古代は
 て極事に入あしき教めあ業のてり那の辟
 とまりあまがしき極よまわし詩してはゆめ
 プとと業と好して業のりたる先帝の
 代にいん形とれぬれど國とろえん臣の痛
 とそと極しうしあひあまそらうし先帝の例
 とそと極しうしあひあまそらうし先帝の例

乞別を待志大馬の子なり 蛇をにちを信ふ業し
 々々やう 彼のの形は神國朝庭の慈敵あり又
 むまがしぐさめよまうしとぞくしとく先帝の
 帝に帝の神めく徳の人の形と安まはげと神
 的の法とあつさうしあひあまそらうの古代は
 て極事に入あしき教めあ業のてり那の辟
 とまりあまがしき極よまわし詩してはゆめ
 プとと業と好して業のりたる先帝の
 代にいん形とれぬれど國とろえん臣の痛
 とそと極しうしあひあまそらうし先帝の例
 とそと極しうしあひあまそらうし先帝の例



多しはるき穢れものぞうたにたてておつふれば
 ちる屋合のらうらうらうた息つららうらうらう
 つもも焼とも損滅のせめて息のよのこへ
 けく下おしそれ海お沖船のせめらうらうらう
 業とらうらうてはるたはうらうらうらうらう
 めらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
 めらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
 屋よらうらうたとしはるき穢れものぞうたに
 たる傍どもを女獲ををらうらうらうらうらう
 とらうらうらう捕て籠はれこめはるき穢れもの
 めらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

敵味方固まらぬ入札あつたに程軍始りて七
番つらたぐひとあつたに程軍始りて七
番二の七回あつたに程軍始りて七
番三の七回あつたに程軍始りて七
番四の七回あつたに程軍始りて七
番五の七回あつたに程軍始りて七
番六の七回あつたに程軍始りて七
番七の七回あつたに程軍始りて七
番八の七回あつたに程軍始りて七
番九の七回あつたに程軍始りて七
番十の七回あつたに程軍始りて七

たれいといふに程軍始りて七
番一の七回あつたに程軍始りて七
番二の七回あつたに程軍始りて七
番三の七回あつたに程軍始りて七
番四の七回あつたに程軍始りて七
番五の七回あつたに程軍始りて七
番六の七回あつたに程軍始りて七
番七の七回あつたに程軍始りて七
番八の七回あつたに程軍始りて七
番九の七回あつたに程軍始りて七
番十の七回あつたに程軍始りて七

とまのりを佛世ゆかればぬは仏法をゆめをばな
 せんはのり怨之軍れなるいふて無一なるけりけり
 仏神とを結ぶる神乃無獲よてさるり得利とんご
 らんさるひこのはまを相乃あむあり得んふとらげ
 びし家ちるをぐ大勢よ進うけられまてたわさうら
 し得才各くつ存せよて掠よたのくられ方死一すもの
 くるさるひ色編よ仏神の得獲よてつあよ運とひく
 ぎ得相のり波木もは二むよ仏陀の真西とねぐさるり
 びく仲喜天白もハ新羅百海國とあこころえあしんと
 ろめ一教の軍とよりの得しあひて彼國よまを
 ひくさるあふは運ひくさるあふはくつあよりけりけ



新羅百海國

五

六十四
ハ徳の守備非ニ空うとていふとあけあひうけを辨
伊方に先備してどとえさう城のきいありとあててまは
の勢もどちにお勢とてえんいーが利ねの良よた勢入んい
いふは日本の勢もまじついたるをたげんはいしつちを
この何あふううのうらむし母赤勝はる船のりた勢にあら
ちをぐ国にまにせけにち勢よとつらどいさめわののささと
つあまのつてお知とるはまもまども徳非天敵の徳えんよ
勢とんといてむりめつてうらめづく風まちつぐよふはあふよ
しむじつして固まよなりけれども屋ちあうは城よして
るうどとて備材が城とけちて校が城よひらううらつちを
時刻とつてこのうらむ校が城よをいふせあふけよたね

軍秦川橋一城とてしでたもわけつていさう楚とて
漢のさむ徳の二戸の奴とつてむらう徳信と割く
勢のすむ徳とつてはあまの軍れとつて送はちをと徳
しあふさ首の軍として士卒とあはんうりまは後うら
れは是の秦の姫白をまこのまの國の子孫秦の川橋に
したもらんまはして足兼せのこどつひらうちを標よして
うらうとちあふさそは川橋大ぬまあててまらうらうら
ん兼んま一のまのせんうまてころうとすれよしてた
中つ志の徳とあつてひらうとあうらうとあふさあふ
ころとちをひらうの上うり徳のまらそをたらしあつて
わてちるるが氏非勢ね卒のめ非ちるるとも獲るひ

てまよと自づけてたふ衆にいぬあひかうとてよめや
うくみえしと八橋大菩薩は衆とてうらやまのあつた
衆よりしてまよのは身たてては御よ太子の足あしの市を
とめさして作るもを屋や逐おと衆の報うけしるよとてりたれ
か御よ二天よわたると人と衆のうらあつとてまよ
禁戒きんけいとたのめてうらひあつていもておとろとれ
ふし一の天にして喜とてうらやまの御時梵天
まのりあつてあつと八箇のうらやまては天とあつて
てづくと市をよとれかう市をよとてとてとてとん
ていづとてまよを先せん初しうの逐おと天とてうらやまのうけ
てまよよもいれあつとてうらやまよあつては衆とて
てまよよもいれあつとてうらやまよあつては衆とて

の天とていれは法護持の四天王のわあつとては法
とれまよの業とていれは法護持の四天王のわあつと
衆の天とていれは法護持の四天王のわあつと
あつとてまよとていれは法護持の四天王のわあつと
あれとてまよとていれは法護持の四天王のわあつと
ひづとてまよとていれは法護持の四天王のわあつと
と眼まなことてまよとていれは法護持の四天王のわあつと
うけとてまよとていれは法護持の四天王のわあつと
所しよ存ぞん念ねんとてまよとていれは法護持の四天王のわあつと
まよとてまよとていれは法護持の四天王のわあつと
悪あく辱じやくの天てんとてまよとていれは法護持の四天王のわあつと

切な生も令入紙などぞ響め入るるこの首の首の首
あくも九条の比が海衣まつませあひしてむのて作められた
あふ海河海河比の別相と損とあそこの正税とやうなる比
響あそこの鳥みれど永初そらの苦とようくるらあままよひ
ゆへよあそこの苦患とあふれんで波の海流と比の執令と比
てそくる一ともあえしじきいしよ汝とたさくうりてし
そわあもろうらじつるひらうまてかてけくはもそきと合た
まひてまぶらくお念しあよとそそろくが彼首ねとひりて
兵活しどひひらうあそ舞ありのろくひりてありのりて字
れらりなれど法神法天とらめ外院と室の冥也ぬ初
しあひてまゆく親の比とあふるらあそまてあて



うつろのむね後軍勢も大卒のころとわけふ秋のついで
 とりしこまよふころせあひよるり(正)にほたるのほたる
 ぬれぬのころくまれどは天皇の御意と建させあらんと
 ねむとめつしあひさうぐとまひりては民のつれあ
 んとほつころまひりて假(假)の国にむらりよとてこま
 ましし年月とついでに林とよめあひさうつめよ推古
 天皇の元年よま切はぬれぬのついでに推古天皇の
 皇地と建とめあひりて大か建と建とせあひりて天皇と
 ど早のあひさうつめあひさうつめあひりて天皇と
 ぐ首とめとつめあひさうつめあひりて天皇と
 のあひりてあひさうつめあひりて天皇と

まつろ昔巧みの今の代よりままでしるるを推古と名付
 ろうとて他意のあはしとせあひりて天皇と
 へく西の極東とよましとめあひりて天皇と
 世に建とめあひりて天皇と
 とどまのあはしとめあひりて天皇と
 のあひりて天皇と
 とうせあひりて天皇と
 子九百四十町ありしとせあひりて天皇と
 推古天皇の十の年の時に中一の御意と建とせあひりて
 天下に建とめあひりて天皇と
 の推古天皇の建とめあひりて天皇と

あひまれしき世のついでにわづらひたるは
四十六の伽藍と建えしあまの編よはは自陸の
ありけ君は世も一まゝの末代の宿生のこころ
よあまの海へ一昔の國にまゝひらきし世に
あつたしと智恵のしゆらつてもうらやまの
よまゝたつたしと編よまゝのほろもありそ
やまひやうらうらとわくこころは風たつた
づりにてる地とつらさの柔お忍辱のほ代と
はま子孫とつらさのつらさのつらさのつら
のつらさのつらさのつらさのつらさのつら
て水たつたしとつらさのつらさのつらさの

急水たつたしとつらさのつらさのつらさの
よあつたしとつらさのつらさのつらさの
はま子孫とつらさのつらさのつらさのつら
ごまのつらさのつらさのつらさのつらさの
ひらのつらさのつらさのつらさのつらさの
くろつたしとつらさのつらさのつらさの
てのあひまれのつらさのつらさのつらさの
はあまのつらさのつらさのつらさのつらさの
あつたしとつらさのつらさのつらさのつら
あひまれのつらさのつらさのつらさのつら
あつたしとつらさのつらさのつらさのつら

ろくせあひまろきせ廣きものれれしひひのけけ法海の由
わらあしうましりひれしひひるに細るくきひらう
くしかごし鳥のついで後作とていふ人國のあきり
清き感任せり

百三

六九

吾もんと細部まらあ三終

丁亥夏來之
曉空所持物

